

新田を耕せ

「ホセア書」10章11～15節までを朗読。

12節「あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ。今は主を求むべき時である。主は来て救を雨のように、あなたがたに降りそそがれる」。

イスラエルの民は、ご存じのように、父祖アブラハムを始まりとして、神の選びの民として立てられたものです。それゆえ、イスラエルの民は、たえず神様と共に地上の旅路を歩んできました。ところが彼らは、決して常に神様を大切に思っていたわけではありません。アブラハムから始まった神様から愛される民でありながら、時に神様を忘れる。時にというよりは、忘れていくことの方が多かったかもしれません。エジプトで奴隷の生涯にあって、神様は彼ら愛するがゆえに、モーセという一人の指導者を立てて、救い出して下さいました。カナン地へ彼らを住まわせて、そこで神様と共に生きる新しい民のあり方、人としての本来のあり方を、神と人が生きる姿を、神様は示そうとなさったのです。

やがて、彼らは王様が欲しいと言い出しました。これも本来は神様の計画にあるわけではなかったのですが、民は周囲の国々の生活ぶりを見てみると、王様を戴いて、軍隊を誇りとして生きている姿に、自分たちも倣おうとしたわけです。神様は民の要求にやむなく答えて、キシの子、サウルという若者を初代の王様と

して立てて、イスラエル王国ができました。神様が王を立てて、国を作ってくださったから、民は神様に仕えたかという、実はそうではなかったのです。もちろん、第二代目の王となったダビデ王は、信仰の父と言われるほどに、神様を尊び、敬い、敬虔に主に仕えてきた王様でありました。ですから神様はダビデの時代を大変祝福して下さい、大いにイスラエルの民は恵まれた時でもありました。やがてソロモンの時代になり、その後イスラエルは分裂していきます。

ダビデの後、イスラエルの民の生活は、神様に背く姿であります。神様の大切な、愛される民となっていながらも、なお、神様を忘れて、他の神々、偶像の神々に心を、思いを寄せる、さらにそれを求める結果になりました。やがてイスラエルの民は、北イスラエルと南イスラエルの二つの大きな国に分かれてしまいます。そして北イスラエルは、やがてアッシリアに滅ぼされ、無きものとなってしまいます。次なる残されたユダの国も同じく、少し時代はずれますが、バビロン帝国によって滅亡してしまう。イスラエルの民の歴史は、昔の物語、よその国の話かという、実はそうではない。今、イエス様の救いにあずかった私たちの生活でもあります。私たちはかつて神様も知らず、イエス様も知らないで、この世に生きていました。そういう中から、神様はいろいろなきっかけを与え、また問題を起して、あるいはいろいろな境遇において下さって、「私のところに帰ってきなさい」、

「神に帰れ」、「主に帰れ」と呼びかけて下さった。そればかりか、いつでも神様へ帰ることができるように、私たちがきよめて、神様の前に義なるもの、罪なき者として立つことができるように、私たちを整えて下さったのです。イエス様が十字架にすべての事を成し遂げて、救いのわざを完成して下さいました。そして今では誰でも信じる者に救いを得させると約束して下さいました。イエス様を信じる人に救いを与えて下さった。

かつてはキリストを知らず、神様と縁のない、この世にあって肉の思い、人間の情欲と損得利害、いろいろな欲得だけで生きてきた私たちであります。さまざま争いやねたみ、うらみ、つらみ、つぶやく思い、そういうドロドロとした情念、人間の抜きがたい罪に苦しみ、悩まされてきた。神様のために、功績を遺した、事業を起こした、名を挙げるような事をしたかという、何もしていません。神様にとって、邪魔な存在であり、価値のない者でした。そういう中から、創造者、造り主である神様は、人として造られた初めへと私たちを立ち返らせて下さる。そのみわざがイエス様の十字架のあがないです。イエス様を信じて、今は神の子ども、神の民と、信仰によってイスラエルの民とされたのであります。神様は尊いひとり子をも惜しまないで、私たちの身代わりとして、罪を負わせて下さった。今、その功績により、罪を赦された者、義なる者とされ、神と共に生きる新しい生涯に変えられました。

私たちは神様に愛される、イスラエルの民、神の民とされながら、どれほど神様のご愛と恵みに感謝し、心から応答しているか、まことに心もとない話であります。そればかりか、イスラエルの民の歴史を紐解きますと、彼らは繰り返し罪を犯し、神様の心を痛め、失望させるような事態を起しますが、まさにそれと同じように、私たちが今もイエス様の恵み、ご愛のゆえに、主と共にある新しい生涯に入れられながらも、なお、時にそれを忘れ、勝手な歩みに落ち込んでしまう。神様が私たちと同じように人間の心でしかなかったら、とっくに愛想を尽かしていらっしやる。「また、やったか」と言われる所でしょうが、神様は極めて忍耐強く私たちを顧みて下さる。

それはなぜか。理由はありません。ただ私たちを愛する故です。イスラエルの民に対してもそうであります。神様はこのイスラエルの民を愛して下さいました。彼らがどんなに神様に背き、他の神々に心を捕われようとも、彼らを決して捨てない。忘れない。繰り返し、様々な手立てをもって、「神に帰れ」、「主に帰れ」と呼びかけて下さる。神様の深い思いの根本は、ただイスラエルを愛している。ただそれだけです。神様がイスラエルを愛していらっしやる。それと同じように、今、ふつつかな歩みでしかない、転びつまるびつの歩みでしかない私たちを、なお神様は愛して下さい、たえず私たちに干渉して下さい。いろいろな事態を与えて、「もう一度主に帰れ」と呼びかけて下さる。イスラエルの民のそういう失敗の時、

様々な問題を起す度に、神様は預言者と
言われる神の人を起して、その人に神の
霊を与え、力を与え、警告を与え、神の
民としての歩みを整えて下さいました。
その中の一人がホセアであります。

ですからホセア書は神様がどんなにイ
スラエルを愛しておられるかという、愛
の証しです。ホセアという人を神様は選
びました。ちょっと読んでおきましょう。

「ホセア書」1章1-7節を朗読。

神様はホセアに臨んで、命じられまし
た。それはゴメルという娘と結婚せよと
言われるのです。しかもそのゴメルとい
う女の方は淫行の妻、淫行によって生ま
れた子とありますように、彼女は不品行
な人でありました。あっちの人、こっち
の人、次々とそこで関係を結んでは子供
が出来るといふ人。そしてホセアからも
離れて行ってしまいます。しかし神様は
ホセアに、ゴメルをもう一度、自分の妻
として迎えよとお命じになります。それ
は、神様が愛してやまないイスラエルの
民でありながら、他の神々、他のものに
心を移していく。偶像礼拝とよく言われ
ますが、確かにバアルの神、アシラの神
という他の偶像の神々を自分たちのと
ころに取り込んだことですが、そればかり
ではなく、人が自分の力を頼みとする、
国が戦車や兵士、あるいは軍隊などを頼
みとする、人が人の力を頼みとする、そ
れを自分の力とすること、これが偶像礼
拝でもある。そして神様に背くことであ
ったのです。まさに、イスラエルは神様
によって愛されながら、それ以外のもの、

神以外のものに心を移す、心を奪われる。
まるで、愛する奥さんが次々と別の男性
のところに身を寄せるような、そういう
苦しみを神様はホセアにも、具体的に体
験させる。その中で、繰り返し、どんな
に神様がイスラエルを愛しているかを語
っているのです。これが「ホセア書」を
貫いている神様の御思いであります。6
章を読んでおきたいと思います。

「ホセア書」6章1-3節を朗読。

1節から3節は、神様が語っている言葉
であります。神様が「さあ、わたしたち
は主に帰ろう」と。神様が帰る必要はな
いのですけれども、その前から続してい
る言葉です。神様はイスラエルの民に繰
り返し警告を与える。さまざまな問題を
起しては、イスラエルの民が悔改めるこ
とを求められるのです。ところが、彼ら
はいっこうに主に帰ろうとしない。だっ
たら、もう私は口を出さない、手を出さ
ない、神様はしばらく退いておこう、隠
れておこうと決める。やがて何か悩みに
あって、苦しいことに会うと、「さあ、わ
たしたちは主に帰ろう」と、彼らは目が
覚めて、わたしを求めてきてくれるに違
いないと、ここまで神様が私たちのため
に忍耐して下さいている。これが神様の
愛です。イスラエルは身勝手な事をして、
神様を忘れて、アッシリヤを頼み、ある
いは様々な他の国、シリヤを頼み、人の
力あるものに心を寄せようとする。しか
し彼らを捨てることをなさない。徹底
して自分の民であるイスラエルを愛して
やまないのです。

それは今、私たちに対する神様の思いも同様です。ひとり子を賜うほどの限りなき愛をもって愛して下さる神様、私たちがどんな状態に落ち込もうと、神様は「私たちを捨てた、お前なんか知らん」とおっしゃる方ではない。6章1節に言われているように、「さあ、わたしたちは主に帰ろう」と、悔い改めて、主に帰ることを待っていらっしゃるのです。傷ついた私たちを、神様のほうがいやし、強め、新しく整えて下さる。その結果、私たちが3節にあるように、「**私たちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう**」、ますます深く神様のご愛に触れる、神様のご愛に満ちた御思いを悟る者となつてほしい。これがホセアを通してイスラエルに繰り返し語り続けていることです。ところが、北イスラエルは滅びていきます。残ったユダの国も、アッシリヤ帝国が、バビロンが、彼らを攻めていきます。そして今や、風前の灯という状況にあって、神様が語って下さる愛です。

10章11節以下に、「**エフライムはならされた若い雌牛であって、穀物を踏むことを好む。わたしはその美しい首を惜しんだ。しかし、わたしはエフライムにくびきをかける。ユダは耕し、ヤコブは自分のために、まぐわをひかねばならない**」。

このエフライムというのは、ユダの人々、イスラエルの人々を語る言葉の一つですが、イスラエルの人々は若い雌牛、神様に愛されている新妻であつてとあります。まだあまり苦勞を知らな

い。イスラエルの国、ユダの人々は、まだ苦しい、辛い事を経験したことのないものであつて、穀物を踏むことを好むと言われています。かつて脱穀をしたり、麦や穀物を精製するとき、牛や動物によって踏ませる。その後、「**しかしエフライムにくびきをかける**」とありますように、今度はくびき、2頭、3頭という牛を並べて、そこに横木をおいて、鋤やそういう重い鋤をひかせる。こういう二つの大きな作業があります。しかしこの若い雌牛は、できるだけ楽な仕事がしたい。きれいな所で、収穫した穀物を脱穀するために麦を並べて、その上を踏ませるということをさせる。そっちの方がやりやすい。ところが神様はそうはさせない。その後にありますように、くびきをかける。確かに神様はこのエフライム、ユダやヤコブのすえであるイスラエルの民を、耕す、鋤や鋤をひくものと言われる。これはつらい仕事であります。なぜならば、堅い大地を、鋤で引いて行くわけですから、かなり労力がかかりますし、苦しい、つらい作業であります。でも神様はあえてそれを彼らに求めると言われる。これは、やがて起こってくるバビロン帝国に彼らが滅亡させられて、国が奪われていく姿ですね。それは忍びない事、つらい事、まるで牛がもっと厳しい、堅い石ころだらけの大地を鋤で引き起こしていくような、そういうつらい目にこれからあうぞと、神様はおっしゃるのです。バビロンを起して、イスラエルの民に攻め上らせたのは、実は神様ご自身です。それはイスラエルの民に、できるだけ苦勞させたくない、楽をさせた

いと神様は願うのだけれども、それではこの民が志し堅固な者となることができないから、彼らにくびきをかけて、大地を耕させるとおっしゃる。困難な事態、悲しいつらい事態の中に人を神様は置かれます。確かにそうです。私たちはイエス様の救いにあずかって、神の民と言われながらも、次々と悩みがあり、悲しい事があり、辛い事があります。先だってもお話ししましたように、クリスチャンになったら、何にも悩みのない、しあわせな、事の無い人生を送れるかという、そうはなりません。だったら何のために信仰をするのだと言われます。イエス様を信じたら、もう何にも心配なく、左うちわで、楽な人生を送れると思ったのに、次から次へと問題が起きて、イエス様なんか信じないほうがよかったと文句を言われたこともあります。確かにその通りです。

しかし、これは大切なことだからです。それはイエス様を知らなかった時の苦しみ、悩み、悲しい出来事、試練と言われる事柄と、イエス様を信じて、神の民とされた私たちが受ける悩み、苦しみ、悲しみは、同じようであって、全く違うものです。どう違うか。それは今、救いにあずかって、神の民とされた私たちに対して神様が与えなさることと信じるからです。神様を知らなかった時は、自分のせいであり、人のせいであり、社会が悪い、会社が悪い、いろいろな原因をそこに求め、解決がつかないことであきらめたり、あるいは憤りや、悲しみや激しいのろいの中で、心を闇に閉ざされています。

した。ところが、救いにあずかって受ける一つ一つの悲しい事やつらい事、それは救いにあずかる前と同じであったとしても、今は違います。なぜならば私たちが愛して下さる神様はすべての事をご存じで、なおその重荷を負わせなさる。まさにここにあるように、くびきを負わせなさるのです。実はそれによって私たちが神の民にふさわしく整えられ、新しく造り変えられるためであります。12節に「**あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ**」と。イエス様の救いにあずかって、罪を赦され、キリストの霊、御霊に満たされて、今は神と共に生きる者とされました。そういう私たちに辛い事、悲しい事、苦しいと思われる事態が起こる。それはそのくびきを負うて、大地を耕していくことです。私たちの頑なな心、イエス様の救いにあずかったと言いつつも、古き自分、己があり、心にさまざまな肉につける思いが消えないままにくっついている。固くなった私たちの大地をもう一度、掘り起こして、そこから正義を刈り取る。神様の義をしっかりと味わい知る。いつくしみの実を刈り取る。神様がどんなに私たちが愛して下さるか、その苦しみを通して、大地を耕すことを通して、はじめて恵みを収穫するのです。私たちの心を耕して新しい大地に変えていく。

「**新田を耕せ**」、確かにそう思います。救いにあずかって、事がないわけではない。いや、次々に、悩みの中におかれます。その中でぶつかるのは自分の思いで

す。肉の思いにぶつかります。そして人を恨んでみたり、嘆いてみたり、あるいはねたんでみたりと、様々な中におかれ、そういう時にすっかり神様のことを忘れて、あるいは病の中におかれて、痛み、苦しみ、また先に対する望み得ない状況の中におかれると、人は大変苦しみます。まさにくびきを神様は負わせなされるのです。そこでこそ、神様がどんなに私たちを愛して下さっているか、そのためにまず神様の前に思いをゆだね、そして心を新しくしていきます。ここにありますように、「今は主を求むべき時である」と。今は主を求むべき、まさにそういう問題の中、悩みの中にある時、眠ることも忘れて、主を求めざるを得ないところにおかれる。まさにこれは恵みであります。そしてそれは神様が私たちを愛する故であります。

その悩みの中で、新田を耕せと言われる。新田を耕すとは、私たちにはあまり馴染みがありませんが、戦後、いろいろな所に開拓に入る。福岡にいらっしゃる一人の兄弟は大分のほうで、戦後、生活のために郷里の原野を畑に作り変える開墾された。これは並大抵の事ではありませんね。深い根のはった切り株を全部掘り起こさなければなりません。しかもそれが馬や牛を使えるならまだいいのですが、人の手で、堅い大地を掘り起こして、それを取り除く。大小たくさん石を全部取り除く。その作業たるや大変だったとその方の証しを伺ったことがあります。新しい田畑を作り出して行く。そこにある困難、苦しみ、悩み、これが今私

たちの受けている悩みであります。その中でしっかりと受けて立って行く。それを耕していかなければならない。だから「自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取り、あなたがたの新田を耕せ」。そこにやがて正義をまくことができ、そしていつくしみの実、神様の実を私たちはいただくことができると約束されている。

「今は主を求むべき時である」。今、私たちは主に信頼して、神様に信頼して、与えられたそのくびきを負うて、耕すべき大地を、堅く、石ころだらけ、切り株だらけ、何一つ、そこには慰めも力も与えられませんが、そこでただ主を求めて、神様に信頼して、大地を、新しい田畑を作り出していけと、これは私たちに対する神様の愛のみわざ、恵みです。というのは、13節以下に、「あなたがたは悪を耕し、不義を刈りおさめ、偽りの実を食べた。これはあなたがたが自分の戦車を頼み、勇士の多いことを頼んだためである」と。イスラエルの民も、ここにありますように、悪を耕し、不義を刈りおさめ、偽りの実を食べた。これは他ならない、後半にあります自分の戦車を頼み、勇士の多いことを頼む。言うならば、自分たちの力があるから、この戦車があるから、こういう兵器があるから、大丈夫と頼む。神様から離れること、まさにそれは悪を耕すこと、また不義を刈りおさめることに他ならない。神様を離れて、自分の力を誇り、知恵を誇り、自分のなすわざを誇りとする限り、そこからは不義を刈り取るだけ、悪を収穫するだけのことだと

神様はおっしゃる。

今、私たちに対しても、神様はそのことを求めます。ついでいろいろな問題に会う時、辛い事に会う時、神様以外のものに、あの事が、この事が、これがあるから大丈夫とそういう悪を頼みとする、そして不義を刈り取ることになっていきます。それに対して神様は、「そうではない、そういう問題が起こってくる時こそ、自分のために正義をまき、いつくしみを刈り取るために新田を耕せ、そこで新しい大地を切り開け」とおっしゃるのですね。今まで自分が住み慣れた、生活に慣れた場所ではなく、全く新しい、人の手のつかない、自分の経験のなかったそこへ踏み出していけと。そこは困難が伴うであろう、苦しみがあるだろう。しかしそこに正義をまくならば、やがていつくしみを刈り取ることができる。そのために主を求めよ。今は、主を求むべき時。神様の力を求めて、神様のあわれみにすがって、神様のご愛に信頼して、与えられた問題がどうであれ、悩みがどうであれ、そこでしっかりと大地を耕していく。そこには慰めを得るものもないかもしれません。あるいは私たちを励まし、望みを与えるものはないかもしれません。しかし、あるのはただ一つ、主が共におられる。今は主を求めるべき時です。何を私たちは求めているのでしょうか。人の慰めでしょうか。誰かの同情でしょうか。そうではなくて、主を求めて、目の前におかれている問題を引き受けて、そこを逃げないで、新田を耕せ、新しい田を開けとおっしゃいます。

どうぞ、心をしっかりと、帯を締めて、主を求めて、大胆に主に信頼して、新しい田畑を切り開くわざを始めていきたいと思えます。もうこの年になって、そんな必要はないと思しやすい。そんなことはありません。神様はいつの時代でも、いくつになっても「取るべき地は、なお多く残っている」(ヨシュア 13:1)とおっしゃる。この主を求めること、神様に期待し、信頼し、新しい田を耕して、今まで知らなかった、味わわなかった世界を、恵みを刈り取っていききたいと思えます。

ご一緒にお祈りいたしましょう。